

回想法による「神埼の思い出ブック」作成のプロセス 神埼地域における高齢者の生活史作成の試み⁽²⁾

長野 恵子・江口 賀子・副島 順子¹

(西九州大学健康福祉学部社会福祉学科 西九州大学健康福祉学部健康栄養学科¹)

(平成24年11月14日受理)

**The Process of Creating the Kanzaki Memory Book Using Reminiscence Therapy
documenting the life histories of elderly people in Kanzaki region, Japan (2)**

Keiko NAGANO, Shigeko EGUCHI and Jyunko SOEJIMA¹

Department of Social Welfare Science, Faculty of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University

¹*Department of Health and Nutrition Science, Faculty of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University*

(Accepted: November 14 , 2012)

Abstract

This paper reports the creation process and examines future research objectives for the Kanzaki Memory Book. The book records the life histories of elderly people from the Kanzaki region, Japan.

Group interviews were conducted by applying reminiscence therapy to 46 senior citizens, who live in residential homes (instead of retirement homes) and were born and raised in the university area of the Kanzaki region of Saga prefecture prior to WWII. By categorizing the verbatim reports from these interviews, the authors discovered region-specific life histories that can be attributed to communal living, which was common before and after WWII. The exemplary episodes of each life history category are summarized in the Kanzaki Memory Book. Additionally, the special event and every day meals documented in the Kanzaki Memory Recipe Book, created a year ago, were also added to the memory book. Necessary future research includes an interdisciplinary investigation of the creation of life histories and exploration of the use of these books for student education and on-site nursing care.

キーワード：高齢者、生活史、回想法、神埼地域、世代間継承

Keywords : elderly people, life history, reminiscence therapy, Kanzaki region, intergenerational successiveness

I 問題と目的

高齢社会の到来に伴い、個人の尊厳を大切にできるケアの充実が必要とされ、高齢者の心理的支援の重要性も増してきた。

高齢者に対する心理的援助法の一つとして、回想法は現在、幅広い職種に用いられている。1960年代にアメリカの精神科医 Butler は、高齢者の回想が自然に起こる心理的過程であり、パーソナリティーの再統合へと導くような積極的な役割を持つことを示し、回想法を提唱した¹⁾。これを契機として、欧米でさらには日本でも回想法の臨床と研究が広く行われるようになり、認知症を有する高齢者への実践、介護予防プログラムの活用、在宅の健康な高齢者への適用、世代間交流等、対象が多様となり、地域における実践へと広がりを見せている²⁾³⁾。

高齢者の心理的支援においては、長い歴史を持つ人生の先達として高齢者を尊重し、これまで培ってきた人生の歴史、生活、文化的価値に関心を持ち理解することが重要な鍵となる⁴⁾。また、高齢者が生きてきた社会の出来事（戦争や災害など）や地域の生活文化に注目する必要がある⁵⁾。

一方、本学では健康福祉実践センターにおいて、平成元年以来24年にわたり「チャレンジ幸齢セミナー（旧名称「高齢者教室」）」を開催し、地域の高齢者を大学に招いてきた。レクリエーション、回想法、動作法、調理実習などのプログラムを実施し、高齢者にとっては生涯学習の機会であり、学生にとっては生きた学びの場、そして両者の世代間交流の場となってきた⁶⁾⁷⁾。参加高齢者は70～90歳代で、ほとんどが毎年続けて参加しており、なかには20年近く継続している人もいる。長年神崎に住み戦前から戦後にかけてこの地で過ごしてきている方も多く、セミナー活動中にこれまでの生活について語る場面はある。しかし、この地でどのような出来事があり、どのような生活が営まれたかを系統的にまとめたものはない。そこで、今後の学生教育および地域における高齢者支援に資するために、大学近隣地域での高齢者の生活史を聴き取り、記録化する試みを行うこととした。

著者らは平成21年から3年間かけて、大学近隣の地域在住高齢者に戦前から戦後にかけての神崎地域の生活史、食文化について回想法の手法を用いて聴き取りを行った。

1年目は、チャレンジ幸齢セミナーにおいてグループ回想法を実施し、そののち神崎生まれで神崎育ちの方を対象とした次年度調査への協力者を募集した。2年目に「神崎の思い出レシピ」⁸⁾、3年目に「神崎の思い出ブック」⁹⁾を作成した。

「神崎の思い出レシピ」は、神崎広域地域（神崎町、千代田町、背振町）の行事食と日常食のレシピおよび、

その食事にまつわるエピソードをまとめたものである¹⁰⁾。前年度チャレンジ幸齢セミナーに参加していた高齢者57名の中から、調査協力の意思を表明した神崎生まれ育ちの人10名に呼び掛け、最終的には7名の女性参加者によるグループ回想法を6回実施するなかで語られた内容をまとめた。食をめぐる様々なエピソードが語られたが、地域による違い、人数の少なさ、対象者が女性のみであった点が、記録化を行う際の課題となった。

「神崎の思い出ブック」は、前年に取り組んだ内容をもとに、食文化だけでなく終戦前後の生活史を含めたテーマ設定をし、調査場所を大学近隣地域に限定して、男性を含むより多くの高齢者に回想法の手法を用いてグループインタビューをおこない、冊子として完成させた。

そこで本稿においては、大学近隣地域における高齢者の終戦前後の生活史を記録化した「神崎の思い出ブック」の作成プロセスを報告し、課題を検討する。

II 方法

1. 予備調査

神崎地域の食文化・生活史に関する情報を収集し、本調査への協力依頼を行う地区を検討するために平成23年5月～6月にかけて予備調査を実施した。

対象は、神崎市役所において高齢部門担当者および食生活改善協議会の委員2名（70歳代女性）、さらに神崎老人クラブ連合会事務局において79歳男性に対し、各120分ずつインタビューを行なった。この結果、現在の神崎市は町村合併により市が広域となっており、地域によって異なる部分が多いので、特性が明確になるようなエピソードを抽出するには、手始めに大学近隣の地域に限定した方がよいという結論となった。

2. 本調査

本調査では2地区において3回のグループインタビューを行った。

1) 対象地域と対象者

予備調査の結果をもとに、神崎地域の中でも西九州大学を含む近隣地域である尾崎西分と岩田の2地区を調査対象地区として選んだ。老人クラブを通して調査依頼をおこない、この地で生まれ育ち戦時中の暮らしを体験した高齢者74歳～90歳の計46名（男12名、女34名）に聞き取り調査を実施した。さらに、岩田地区の対象者の中から4名の協力を得て、再度小グループにて3回目の調査を行った。その内訳は表1のとおりである。

3回目の対象者である4名の女性はいずれも80歳代であり（89歳、86歳、83歳、81歳）、共に幼い頃よりこの地で育ち現在も互いに近くに住み、地域にまつわる共有

表1 調査場所別の対象者等の内訳

回	調査場所	調査期日	対象者			調査者		
			男性	女性	合計	教員	院生等	合計
1	尾崎西分	平成23年10月9日	3名	22名	25名	3名	2名	5名
2	岩田	平成23年11月8日	9名	12名	21名	2名	3名	5名
3	岩田	平成23年12月10日	0名	4名	4名	3名	1名	4名
合計			12名	38名	50名	8名	6名	14名

のエピソードを持っている。

2) 期日と場所

期日：平成23年10月～12月(表1)

場所：1回目は神崎市神崎町尾崎西分公民館

2・3回目は同町岩田公民館

3) 手続き

【1・2回目】

回想法の手法を用いたグルー プインタビューを実施。

1回あたり90～100分程度。途中にお茶とお菓子を交えながら、4～5名の小グループに分け、聴き手として教員、もしくは大学院生が入った。

テーマは神崎地域(尾崎西分・岩田)の生活史・食文化・食生活歴であり、テーマ項目については、前年度調査¹⁰⁾にて共通の項目として抽出されたものを中心に行った。

聞き取り内容は、ICレコーダーとビデオカメラによって記録し、逐語録をもとに切片化し、大学院生、教員の計4名によるカテゴリー化を行った。

【3回目】

対象者は4名、聴き手として3名の教員(リーダー1名、コリーダー2名)、記録係として1名の院生が加わり、公民館の小座敷において静かな雰囲気の中でグループ回想法のやり方で実施した。お茶とお菓子を入れて約120分間であった。

「この地での終戦前後の生活ぶりについてお話を聞かせください」という大きなテーマのもと、1・2回目の調査で不十分であった項目(地域での災害、終戦時の様子、青年期の楽しみ、共同風呂、食)について一人ずつ話していただいた。

ICレコーダーとビデオカメラによって記録し、逐語録を作成し、この中から具体的なエピソードを抽出した。

Ⅲ. 倫理的配慮

調査では、研究目的、方法などを調査協力者に紙面を用いて説明し、合意を得た。結果についても調査協力者に確認した上で発表の許可を得ている。さらに、本論文では事例の詳細な背景を伏せることで個人が特定できないようにした。

Ⅳ. 結果と考察

1・2回の調査から得られたエピソードを、内容別にカテゴリー化したものが、表2である。

この結果から、戦前戦後において日本各地で共通する生活にかかわる内容も抽出されたが、神崎の地域性に根差した特徴的なエピソードも見出された。すなわち農村地域で当時自給自足に近い生活の中、もやい風呂や堀あげ、くんち、青年倶楽部、葬式など互いに協力して支え

表2 尾崎西分、岩田地区における聞き取り調査結果の内容分類

項目	尾崎西分		岩田(男)		岩田(女)	
	切片数	項目例	切片数	項目例	切片数	項目例
生活	5	クジラ売り 魚売り 塩もの キリコイ(重箱)	11	がんじわら もやい風呂 はだし 着物 下駄 くつの配給	11	生魚売り ほら貝 洗濯、貰い井戸 鶏飼、卵買い 塩クジラ売り もやい風呂
あそび	21	桑の実、野イチゴ、セミ捕り、ドジョウ捕り ズ花投げ	11	けんか、メンコ すもう、竹馬 瓦投げ、兵隊ごっこ	5	数珠玉のおはじき、数珠玉のお手玉 そら豆隠し
学校生活	5	もんぺ 雑のう セーラー服	3	小学校の遠足地 女学校 男女別クラス	7	運動靴くじ引き 着物、セーラー服 足半草履、はだし 雑のう 教育勅語

戦争	4	終戦 空襲 徴兵 勤労奉仕	14	生活苦 防空壕づくり 外地 飛行場づくり	8	防空壕、出征家族、 玉音放送 戦勝祈願、提灯行列 空襲 原爆
災害	0		2	昭和22年の大雨 堤の決壊	2	昭和14年の大干ばつ 昭和22年の堤決壊
青年時代	1	青年会	6	日ノ隈池のボート 野芝居、映画館 青年倶楽部	3	映画館 処女会 大ばか盛り食堂
仕事	1	田んぼ仕事	2	薪採り 田植え	4	田の仕事、牛の世話 蚕、川で洗濯
行事	2	堀あげ、くんち	1	祇園祭	5	くんち12月25日 葬式（土葬） 結婚式（夜、提灯） 天皇行幸
日常の食べ物	22	イモ飯、ひぼかし、おばやき 卵、塩イワシ、どじょう、はや	0		0	
戦時中食べ物	9	いっちれ、大根飯、麦 芋づる、外米、芋飯	6	タニシの味噌煮、 どじょう、ほうじゃ しじみ	10	高菜のおこもじ、いっちれ しーかんぼ、ズバナ、山ブドウ 大根飯、からいも
行事食	14	ちくわ、てんぷら、 かまぼこ（正月、運動会） 三つめだご（結婚式） ふなのこぐい（くんち） 鶏料理（正月）	5	ソーダ饅頭（祇園） ふなのこぐい（12月）	0	

合い、楽しみを見出す姿や、食生活においては田や川から採取した食材がさまざまにあったことが明らかとなった。

このような特徴的な項目について、3回目のインタビューを中心としてより具体的に語られたエピソードを以下に示す。なお、これらのエピソードは「神埼の思い出ブック」⁹⁾なかに記載されている。

1. 生活面において

1) もやい（共同）風呂

戦前から戦後しばらくの期間、神埼にはたくさんの「もやい風呂」があった。「もやい（催合）」とは「ア・二人以上の者が一緒に仕事をする。共同。おもやい。イ・部落内の共同作業。また、利益の共同配分」¹¹⁾の意味であるが、共有物、共有施設を表すこともある¹²⁾。

近所3軒～30軒まで規模は様々であるが、各家が順番に風呂当番をしていた。風呂が沸くと、「カチ、カチ」と拍子木で知らせた。燃料、水、労力の節約のためでもあったが、大切な交流の場であった¹³⁾。

「岩田地区には3つの共同風呂がありました。一番大きいのが30軒分で、川の水を汲んで薪（まき）や石炭で風呂を焚きました。入浴は、子ども、男、女の順でしたが、混浴になることもありました。赤ん坊がいた時は、近所の人が入浴をすませた子の面倒を見てくれていたので、とても助かりました」（昭和5年生まれ81歳 女性）

2) 履物 ～足半～

戦中、戦後にかけて、履物はわら草履、下駄などで子どもたちの多くははだしで通学していた。終戦後、運動靴は貴重品であった。

かかとの部分がない草履を「足半（あしなか）」¹⁴⁾と呼び、農作業でも使っていた。

「おじいさんは足半を作るのが上手だったので、弟はそれを履いて学校に行っていました。」
（昭和5年生まれ81歳 女性）

「明治のおじいさんがおるところは足半作りよった。私は履きよらんかったね。大正の人は大抵、はだし。痛かったよ。はだしやけん、“あかぎれ”しよったもんね。黒砂糖のような固膏薬をちょっと温めて、ひび割れたところに入れよった。」（大正11年生まれ89歳 女性）

2. 戦争～戦後

昭和20年春以降、終戦までは、福岡、佐賀、鳥栖と各地で空襲がひどくなり、警戒警報、空襲警報とサイレンが鳴っては防空壕に逃げる日々が続いた。この地域では空襲による被害はなかったものの、福岡空襲の時（昭和20年6月19日～20日）¹⁵⁾、多くの人が夜空に真っ赤に浮かび上がる脊振の山並みを見ていた。

「ちょうど麦をわらでかぶせとったら、その夜B29がこの上(岩田)をごん、ごん、ごん、て言うて飛んでいった。どこ行きよっちゃろうかね、ていうて。夜中起きて向こうを見たら、山が真っ赤になっとった。」
(大正11年生まれ89歳 女性)

さらに、昭和20年8月5～6日にかけて佐賀空襲¹⁶⁾があり、焼夷弾があたかも花火のように夜空に落ちていくさまが神埼から見えていた。

「岩田では朝鮮の兵隊が軍隊用の防空壕掘りをして、お庵の所に何人でおったもんね。あちこち何十人も寝泊まりしてからね。処女会で芋煮たりして、持って行った。あの人たちが食うも食わずでおったけん。夕方は自由やけん、食べ物ももらいに来よった。戦争が終わった、ちゅうて喜んでお寺からすっぽ出てきたときには歯がゆかった。終戦になった、て言うて帰ってよかって。」
(大正11年生まれ89歳 女性 / 昭和5年生まれ81歳 女性)

3. 災害

平成23年3月11日の東日本大震災を機に、多くの高齢者が戦時中のことや過去の災害を思い起こした。本調査の地域では、過去に大干ばつ、大水害にみまわれその時の体験が語られた。

1) 昭和14年の大干ばつ

「その年は、春から雨が少なく、苗代でも難しく、丸山あたりの普段ならば扱いにくい湿けっ田だけはちかっと穂が出て米ができました。「昭和14年の大干ばつ、お米は反(たん)と一俵半、堤の増築協議さるる」という歌を作っとったもんね。」(大正11年生まれ89歳 女性 / 大正15年生まれ86歳 女性)

1反(991.74㎡)の田から、通常ならば6～10俵(約360～600kg)の米が採れるが、この年の収穫高はとても少なかったという。

2) 昭和22年6月24日 岩田の堤が決壊

「堤の真下の家では、座敷の中へと水が真っ白になって通り抜けました。あとから『おばあさん、どうしとったね?』と訊いたら、『柱にのぼっとったさい』て言われた。そいばってん、柱の太かつ

たけん、家は倒れんかったね。たまった水が流れてしまったらおしまいやったけど。」(大正15年生まれ86歳、女性)

堤が決壊した年は米ができず、からいも、そばを作りました」(昭和10年生まれ76歳、男性)



写真1 神埼岩田地区の堤

4. 青年時代

1) 青年倶楽部

明治の頃から全国的に組織化されてきた青年会(団)は、各支部では青年倶楽部と称して、共に寝泊り、学び、共同作業を行っていた¹⁷⁾。

「現在の消防小屋が、かつての青年倶楽部です。結婚するまでは、昼間それぞれに仕事をし、夕食を自宅で食べて、夜は毎日泊りに行っていました。話をしたり、歌を歌ったりしていました。9月の衣替えの時には、母親たちが集まり一斉に布団の側を洗濯していました。(岩田地区の元青年倶楽部の皆さん)」

2) 女子青年会(処女会)

大正6、7、年頃から全国的に女子青年の組織化が行われた。独身女性は学校を出て結婚するまで処女会に属し、学びと奉仕活動をしていた¹⁷⁾。

岩田では、月1回夜、例会を開き20人程度が集まっていました。青年倶楽部の横の部屋で、電球もあり本の輪読をしていました。毎月1日はお宮掃除をしました。

年に1度のお祭りの日(12月25日)には、男性が酒を飲んでいいるうちに、女性ばかりで汽車に乗って佐賀まで映画を見に行きました。戦況が厳

しくなると、往復歩いていた時もありました。

行く先は佐賀市の「大ばか盛り食堂」です。井めしを食べるのがとても楽しみでした。映画「愛染かつら」「純情二重奏」、俳優は田中絹代、上原謙が人気でした。(岩田、元処女会の皆さん)

5. 仕事

1) 蚕

「養蚕しよったけん、ほんなこて忙しかったよ。仁比山より岩田の方がさかんやった。畳をはいで、板張りの上に棚を置いて、40枚ずつくらい、部屋中作らるとこいっぱい作って。うちばっかりじゃ、しきらんけん、山の方からも娘さんたちに手伝いに来てもらって。まず、エサを採らんといかん。桑摘みね。1日4回位やらんばやったね。金の爪を両手につけて。米も麦も作りよったけん、忙しゅうて、忙しゅうて。

春、秋、夏と晩秋蚕も飼いよったけん年4回。^{まゆ}繭ばちぎって、機械で毛羽をきれいにして、それをふとかショウケ(竹で編んだ入れ物)に入れて学校さ持って行きよった。講堂に業者の人が来て、ふとか車力に載せて会社を持って行きよんしゃった。」(大正11年生まれ89歳 女性)

2) 農作業

「雨が降ると、蓑笠を着て、唐笠をかぶって田んぼで作業していました。田植えの時は、首の所から雨がター、ター、ター、ター入ってきて、濡れて、濡れて。着物は絞ってよかごと内側からびしょ濡れでしたが、それでも一所懸命しよりました。昭和28年の大水害の時に、初めて雨合羽が登場しました。下の方ではかなりの被害だったけれども岩田は大丈夫だったので、消防団が雨合羽を着て他所の地区へ加勢に行ったのでよく憶えています。雨合羽ができた時は嬉しかったね。どげん仕事したっちゃよかって。ゴムの、ガバガバして重かったですよ。」(昭和3年生まれ83歳 女性)

グループの終了時、農作業に長年携わってきた女性が立ちあがると、その背と腰は丸くなっていた。「これは農業をしてきた働き者への勲章よ」と他のメンバーがその背をさすりながら言葉をかけ、本人は黙って微笑んでいた。

6. 葬式

戦前から戦後昭和40年代まで土葬の所も多く、お棺を4人で担いで行き、掘った穴の中にひもで下していた。葬式は集落の人々の手助けがなければできなかった。

戦中、戦後、農家で米作りをしていた家であっても、供出後は自分たちの食べる米もごくわずかであった。米があと1俵ないくらいの時に、父が亡くなった女性は以下のように語った。

「通夜ではおにぎりを出さんといかん。月夜の晩に、おばさんと二人で米ば洗うて、井戸の水ばかけて、それからご飯を炊いて、出した。そいぎ(だから)あとの米が少なうなったろうが。明日、葬式せんばいかんのに、米がない、どがんすちゃうるか・・・と思ひよったぎ、ところが、部落の決まりとして、1戸から1升ずつ米を持って来てくんさった。そいぎ、その心配がなくなって、寄せてくんさったお米で、立派にお葬式ができた。ありがたかったことを今でも忘れません。」(大正11年生まれ89歳 女性)

昼食べて、夕方葬式で、2食出していた。戦後になったら、持ち寄る米も5合になり、出す食事も1食になった。現在でもこの地区では誰かが亡くなると隣保班の人は米を3合ずつ持参している。

7. 結婚式

「昔は晩にお嫁に行きよった。家の紋がついた提灯を持って。提灯のじーっと並んだごととして行きよったもんね。そいぎ、えすかったー(怖かった)。」(大正15年生まれ86歳 女性)

8. 食生活

1) 普通食 いっちれ

戦時中は米が少なかったので、芋、麦、大根、南瓜、菜っ葉などを入れて量を増やしていた。

「いっちれ」は、干ぼかし(小ふなを焼いて干したものでだしをとり、大根、人参、白菜など家で作っていた野菜を入れ、うどん粉(中力粉)をこねて、うどん状に切ったものや団子状にちぎったものを入れて作る。地域によっては、だご汁、しゅっだご等と言われるが、この神埼地域でもよく食されており、語りの中によく登場する。

“いっちれ”はいつも夕食に食べていました。野菜ばかりで肉を食べたことはありませんでした。

た。子どもが多かったので最後の人は、汁ばかり食べていました。ちくわはご馳走でした。1年に一回、おくんちの時だけで、それはお客さんでした。自分たちは残りもんを食べていました。粗食でした。金のかかるものは着いていませんでした。だいたい『岩田がんじわら(貧乏)』って言っていました。祖母がしまつかった(お金を節約する)ので買うことがいやだったようでした。」(昭和5年生まれ81歳 女性)

このなかで出てきた、ちくわと天ぷらは、当時は特別なごちそうで、お祝い事の時に出来るものだったと前年度のグループの際にも語られている。また、「いっちら」に用いるうどん粉は近くで製粉されていた。

仁比山の小さな地区に旅館が2軒ありました。なぜかという、この地域にはかつて60基の水車があって、千代田方面から馬車で小麦を持って製粉しに来られていました。粉にするまでに2日位かかっていたので、出来上がるまでその旅館に泊っていました。遊ぶところもあったようです。(昭和8年生まれ78歳 男性)

9. お祭り

1) 収穫感謝のお祭り

戦前より12月25日は岩田天満宮の祭り(現在は12月23日)である。3日前から地域の人総出で「ため池(堤)さらえ」を行う。水門を開け下流に水を流し、沈殿した泥土をくみあげる。ため池を掃除し貯水量を増やし、流れを良くするためにため池を干す。その時に干あがった泥土の中に、ふながピチピチとはねている。そのふなを採り、祭り用の「ふなの昆布巻き(ふなのこぐい)」に利用する。神崎の多くの地域でもため池さらえや堀干し



写真2 ふなのこぐい(昆布巻き)

とそれに引き続いて祭りが催されている。

お祭りの料理として、「ふなのこぐい」と「せっかん」が代表的である。

ふなのこぐいは大根、こんにゃく、サトイモと鱈を取って昆布を巻いたふなを大鍋に入れ、味噌をこしてとった「すめ」、佐賀名産のあめがたを入れて一昼夜炊く。せっかんはもち米を蒸した白いおこわである。

「施主の家で前の日からよいこ(3軒位の集まり)がお祭り用の準備をしていました。漬物は、施主の人が早くから漬けていました。せっかんがもれたら(蒸しあがったら)ホラ貝を吹いて近所の人に食事ができたことを知らせました。それを合図に、皆が施主の所に集まってあたたかいせっかんを一緒に食べました。現在では、ホラ貝の代わりにマイク放送で呼びかけています。(大正11年生まれ89歳 女性)

前年度のグループ回想法による調査においても、神崎城原地区において戦後しばらくまで続いた祭りの際、「朝、タン、タン、タン、と鳴り響く太鼓の音は『せっかんもれた(もち米ご飯が炊きあがった)』を知らせる合図です。この音で皆が集まってきました。朝食にせっかん塩イワシ、夕食にふなのこぐいを皆で食べました」(77歳 女性)というエピソードが懐かしさをこめて語られた。

3回目のインタビューの最後に「若い世代に伝えていきたいことは？」と言う問いかけると、しばらく考えたのち、4名ともが「行事は残していきたい」「しめ縄づくりや年始会は残していきたい」と言う答えであった。

以上のエピソードを含む内容は、前年度に整理したものと合わせて、表3に示すように、第1部生活史、第2部戦中・戦後にかけての食事、に分け「神崎の思い出ブック」として冊子化した。

地域在住高齢者への理解を深め個人の尊厳を大切にすることをケアの一助となることを願い、神崎地区の高齢者施設、保健師、栄養士等へこの冊子を配布し、さらに大学においては授業の中での活用を図る。

III 考 察

1. 作成プロセスの振り返り

「神崎の思い出ブック」の作成に当たっては、①1年目に学内における回想法グループの実施および協力者の募集、②2年目に6回連続のクロズドでのグループ回想法を学内で実施し、神崎広域地域でのレシピ集を作成、③3年目に大学近隣地域における生活史の聴き取りのために、公民館にて回想法グループの実施、というス

表3 「神埼の思い出ブック」の構成

第1部 生活史	7 仕事 (1) 蚕 (2) 農作業
1 生活 (1) もやい風呂 (2) 水は、ガスは、電気は？ (3) シャンプーと石鹸 (4) 歩く歩く	8 葬式 9 結婚式
2 遊び (1) 学校帰りに (2) 数珠玉でお手玉 (3) 男の子の遊び	第2部 戦中・戦後にかけての食事
3 学校 (1) 制服 (2) 防空頭巾と救急袋 (3) 小学校では (4) 学徒動員	1 日常の食べ物 (1) いっちれ (2) 三度の食事 卵・にわとり 弁当（修学旅行・学校）
4 戦争～終戦 (1) あちこちで防空壕掘り (2) 空襲と原爆 (3) 燈火統制 (4) 出征兵士の見送り (5) 終戦の日 (6) 歩いて故郷へ戻る	2 身近な食材と料理 (1) シーカンボ（すかんぼ） (2) ほうじゃ (3) 菜の花 (4) のびる（野蒜） (5) 尾羽クジラ（皮クジラ）
5 災害 (1) 昭和14年干ばつ (2) 昭和22年大雨 (3) 昭和28年	3 行事食 (1) みゆき祭とおもてなし料理 (2) おもてなし料理
6 青年時代（青春時代） (1) 女子青年会 (2) 青年倶楽部 (3) 曙座	4 地域のお祭り（岩田天満宮の祭り） (1) ふなの昆布巻き (2) しめ縄づくり (3) 年始会
	5 冠婚葬祭

テップを踏んだ。

学内における②で実施した回想法グループは、すでに参加者とグループリーダー・コリーダーとが長年の顔見知りであり、しかも動機づけが高いメンバーであったために、食以外にもその当時の生活ぶり、戦争体験、水害体験など著者らにとって初めて知る内容があふれるように語られた。この準備段階があったことで、③のこれまで直接的な交流はなかった地域の高齢者に対しても、回想法をスムーズに進めることができたと考える。

このような取り組みをする際に、調査者自身の地域の歴史や生活史に対する理解の深さに加え、地域住民との関係性が重要となってくる。

2. 回想法について

本研究で実施した方法は、エピソードの収集に力点が置かれると、アクティビティーとしての回想法と言うより、回想を用いたグループインタビューと捉えられるかもしれない。筆者らは、高齢者の方々が人生の先輩としてどのような道のりをどのような思いで歩んできたのか

を書きしるし、次の世代に伝えていき、実際の高齢者支援に資することができたらと考えた。すなわち、世代間交流、世代間継承のための回想法と言う位置づけで、語られるエピソードとその背景にある思いに耳を傾けようとしてきた。

3回目のグループでは、少人数の静かな環境で、当時の出来事と共にその思いについても語られた。男手がなく母親と共に農作業に従事する中、「負けるものか」と思い仕事に打ち込んできた姿。父を亡くして、葬式用の米がないときに近所の人が米を持ってきてくれたことのありがたさ、など語り手が今を生きぬく力につながる思いが語られていると考える。

しかしながら「神埼の思い出ブック」に収められ、文字化されたエピソードは、出来事がメインとなり、その背後にある思いまでを十分に文章内に反映することができていない。Watt, L. & Wong, P. (1991)¹⁸⁾による回想の6つの分類(統合的、道具的、伝達的、語りの、回避的、強迫的)に基づけば、本研究の内容は伝達的、語りの回想に該当するものが多い。今後、この地で暮らす高齢者

参考文献

の方々に対して回想法を実施していく時、あるいは個別的心理支援を行なう際に、これらのエピソードが題材となって統合的な回想へとつながる糸口になるのではないかと考える。

回想を促す材料として、写真を用いる場合があり、このための写真集¹⁹⁻²⁰⁾がすでに出版され、写真と共に当時の生活のありようについて実際のエピソードを加えて解説し、回想法を実施していくうえでの方法論として充実した内容を含んでいる。これらの先行研究を参考にしつつ、本研究においては大学での実践活動でかわりのある高齢者（大正から昭和一桁生まれ）をはじめとした大学周辺の地域の高齢者から、今でなければ聞けない終戦前後の暮らしを中心に話を聞き取った。日本全国で共有できるテーマと、この地ならではの特徴的なテーマを組み合わせて、実際の支援場面での活用を検討していきたい。

3. 民俗学との連携の可能性

本研究では、大学近隣地域での終戦前後の生活史として、農業を生業とし、互いに協力し合う姿が、もやい風呂、葬式、青年倶楽部、行事のありかた等をめぐる語りのなかで明らかとなった。また、その生活が堤と水に生かされている地域の特性も見出された。そのなかには現在まで引き継がれている行事や習慣もある。筆者らは、今もなお暮らしを支えている堤を訪れ、そこから下方に広がる田畑や家々を見た時、回想法グループの中で語られた内容を新たに生き生きと感ずることができた。地域を知り、人を支えるという意味を改めて考えた。

近年、高齢者の回想法をめくって民俗学との連携がなされてきている。北名古屋市歴史民俗資料館をはじめとし、博物館における回想法や民具を用いる方法など福祉系専門職との連携も進められている²¹⁻²³⁾。また、民俗学的アプローチによる介護現場での聞き書きの可能性も提言されている²⁴⁾。著者らは、高齢者支援にかかわる心理、社会福祉・介護、栄養学という専門領域から本研究を協働して行ったが、今後は民俗学と連携することで、地域の生活史を世代間継承し、学生教育や高齢者支援の実践現場でより有効に活用することが可能となると考える。

付記

本研究にご協力頂いた高齢者のみなさまとご紹介くださった老人クラブをはじめとする関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、西九州大学健康福祉研究センターの研究助成を受けて行われました。

- 1) Butler, R.N.: The life review; An Interpretation of reminiscence in the aged, *Psychiatry*, 26, 65-75 (1964)
- 2) 野村豊子：回想法とライフレビュー その理論と方法中央法規出版（1998）
- 3) 野村信威：地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み *心理学研究*, 77(1), 32-39 (2006)
- 4) 黒川由紀子：認知症と回想法 金剛出版（2008）
- 5) 下垣 光：高齢者の時代背景を知る意味、志村ゆず・鈴木正典編「写真で見せる回想法」p93-94 弘文堂（2004）
- 6) 長野恵子、花田利郎：対人援助技術の習得をめざした体験教育の展開⁽²⁾ 高齢者教室での15年間の臨床動作法実践を振り返って 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要、35、65-74 (2005)
- 7) 利光恵、長野恵子、花田利郎、池田美由紀：幸齢セミナーが大学生の高齢者に対する認知に及ぼす影響について 臨床心理コースの学生の場合 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要、36、23-28 (2006)
- 8) 江口賀子、長野恵子、副島順子、柴田和子編集：神埼の思い出レシピ 「伝えていきたい神埼の昔」の会作成（未刊行）(2011)
- 9) 江口賀子、長野恵子、副島順子編：神埼の思い出ブック 西九州大学「神埼の思い出ブック」作成委員会発行（2012）
- 10) 江口賀子、長野恵子、副島順子編：回想法による世代間継承のための「神埼の思い出レシピ」作成のプロセス ～神埼地域における高齢者の生活史作成の試み～ 西九州大学健康福祉学部紀要、43、79-88 (2013)
- 11) 新村 出編：広辞苑 第6版 p2802 岩波書店（2008）
- 12) 宮治弘明：もやいの語源と地理的分布 *建築雑誌 日本建築学会*, 105(1301), 14-15 (1990)
- 13) 佐賀市地域文化財データベースサイト 佐賀の歴史・文化お宝帳（佐賀市教育委員会 文化振興課）もやい風呂
<http://www.saga-otakara.jp/search/detail.php?id=1460>
- 14) 藤井裕之：アチック・ミュージアムの足半収集の経緯 国立民族学博物館研究報告、35(2), 363-393 (2010)
- 15) 総務省 一般戦災ホームページ http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/
- 16) 佐賀市地域文化財データベースサイト 佐賀の歴史・文化お宝帳（佐賀市教育委員会 文化振興課）佐賀空襲
<http://www.saga-otakara.jp/search/detail.php?id=2404>

- 17) 神埼町史 神埼町史編纂委員会編 神埼町史神埼町役場発行 (1972)
- 18) Watt, L. & Wong, P.: A taxonomy of reminiscence and therapeutic implications, Journal of Mental Health Counseling, 12, 270-278 (1991).
- 19) 志村ゆず・鈴木正典編：写真で見せる回想法 弘文堂 (2004)
- 20) 野村豊子・黒川由紀子：回想法への招待 スピーチバルーン出版、筒井書房 (1992)
- 21) 野村豊子編集代表 語りと回想研究会 / 回想法・ライフレビュー研究会編集：Q & Aでわかる回想法ハンドブック「よい聴き手」であり続けるために p88-91 中央法規 (2011)
- 22) 波平エリ子：沖縄県の高齢者福祉施設における回想法の取り組みについて 民俗学の視点から 地域研究、3, 37-48 沖縄大学地域研究所 (2007)
- 23) 岩崎竹彦編：福祉のための民俗学 回想法のススメ 慶友社 (2008)
- 24) 六車由美：驚きの介護民俗学 医学書院 (2012)